

「授業改善のための学生アンケート」2024 年度後期 顕彰授業における工夫

2024 年度後期「授業改善のための学生アンケート」の顕彰授業における工夫をご紹介します。

【参考】顕彰の対象となったアンケート項目は以下の 6 項目です。

- Q7 教員の説明はわかりやすかった。
- Q9 教科書や配布資料など、教材は適切だった。
- Q10 学生の質問や相談に対して、教員の対応は適切だった。
- Q14 この授業に主体的に取り組むことができた。
- Q15 この授業の内容に興味を持つことができた。
- Q16 この授業の内容を十分に習得できた。

<少人数部門（履修者 6～19 名）>

「演習」 森下 みさ子先生（人間総合学部児童文化学科教授）

2024 金 2 通年 児童文化学科専門科目

◆「演習」という授業

卒業論文（4 年次）に向けて、個々のテーマを模索しながら、調べ方・考え方・伝え方等の基盤を修得するために 1 年間をかける、3 年次必修の通年科目です。入門科目（1 年次）、基礎演習（2 年次）を経て、自身の関心や適性が見えてきて、さあ、いよいよ「唯一無二のわたしのテーマ」に取り組む！という、まさに学生主体の授業、2024 年度は例年（15,6 人）より若干少なめの 13 人で取り組みました。

◆前期：共通テーマ「遊園地とテーマパーク」に取り組む

◇ミッション・ポッシブル！

前期はみんなの関心を出し合いながら共通テーマを決め、各自の視点を活かして分担、責任をもって各自のミッションに取り組みます。パワポ・レジュメ・カンペの 3 点セットを準備して、5 月中旬からプレゼンが始まります。先輩の残したパワポを紹介することでモチベーションがあがっていきます。図書館の協力もあり「基礎演習」で調べ方・発表の仕方等を教えられているせいか、基本のキが出来ているので助かります。プレゼンは、バズセッションやクイズを挿入するなど個々に工夫をこらすので、回を重ねるごとに熱量があがり、討議も深まっていきます。

◇冊子『遊園地とテーマパーク』作成

卒論に活かせるように、発表と討議を経て深まった内容を文章化して冊子にまとめるようにしています。視聴覚に頼らずに文章で伝える力を養うためです。文章化するのは大変ですが、それによって思考が深まり表現が磨かれる体験ができ、卒業論文という大作に挑む気力が

がわいてくると思います。そして何よりも各自の取り組みが一冊にまとまることで充実感と達成感が得られます。

◇夏休み明けに冊子の論考の講評を行い、白百合祭には完成した冊子とともにゼミの成果を展示しました。外部の人の目にも触れ好評をいただいたことがより大きな達成感と意欲に結びついたと思います。

◆後期：卒論に向けての発表

前期のテーマの探究において、個々の関心だけでなくその人に適した研究方法も見えてくるので、それを活かした卒論テーマを決め、プレゼンを行いました。この時も先輩のパワポがモデルとして機能しましたが、学科研に保管されている卒業論文とつなげて参考にすることができるので、卒業論文への助走として大いに役立ったと思います。発表も冊子も卒論も、先輩たちのモデルがあることによって、憧れをもってイメージしやすいのではないのでしょうか。

「楽しく学ぶ」という児童文化学科の学びの基本方針が、学生主体でもっとも活かされるのが「演習」ではないかと思っています。私自身にとっても、新しいテーマに向き合って一緒に探索を進める「楽しく学べる」授業です。この賞も共に楽しく学んだゼミメンバー全員でいただいたものと思って感謝しています。



<多人数部門（履修者 20 名以上）>

「教職実践演習（小）」 神永 典郎先生（人間総合学部初等教育学科教授）

中田 正弘先生（人間総合学部初等教育学科教授）

2024 火 4 後期 初等教育学科専門科目

○授業の目標と、それを実現する方法を明確に示す

「教職実践演習（小）」は、教職課程の仕上げにあたる科目であり、大学での 4 年間の学びを丁寧振り返り、自身の課題を捉え、それを理論的に学び直すだけでなく、模擬授業の計画・実施、ロールプレイ、資料作成等の方法を用いて「深く追究し」「プレゼンし」「協議し」、教員としての資質・能力として有機的に統合・形成していくことが目標であることを伝え、全員で共有した（Q7）。

○電子ポートフォリオとリフレクションの手法を用いて、自分自身を見つめる

それぞれの学生の学修成果と課題については、各自が manaba に記録した 4 年間に渡る電子ポートフォリオや CAMPUSSQUARE の履修カルテを用いて振り返るとともに、少人数で協同的にリフレクションする機会を取り入れた。自身のそれまでの経験や実習日誌の記述等を基に、リフレクションに取り組み、自己の強みや課題等について、言語化していく

プロセスを大事にした（Q14,15,16）。

○本授業で各自が取り組む課題を明らかにし、理論と結びつけながら学ぶ環境を整える
学生が課題として取り上げたのは、例えば「通常学級における特別な支援を必要とする児童の指導」「授業における ICT の活用」「いじめ問題や不登校への対応」「学級経営における教師の役割」「話す力を伸ばす指導の工夫」「社会科における導入の方法」などであった。より主体的に学修に取り組めるよう、同じ課題でペアやグループを組むようにした（Q15）。また、その課題について、深く追究していけるように、有益な資料と一緒に探したり、必要に応じて教員側から提供したりした（Q9）。教員は、ペアやグループの活動に適宜加わり、助言を行うこととした。

○実際（現場）に学び、自らチャレンジし、協議し、学びを深める
2 人の教員によるチームティーチングの利点を生かし、各ペア・グループと個別に相談し、それぞれのニーズを把握するとともに、課題解決の方法や取組の内容等を話し合った。その結果を踏まえ、近隣小学校での授業観察、教員へのインタビューなどを行えるように環境を整えた（Q10, 14）。また、ICT 活用や教科の指導方法、特別な支援を必要とする児童の支援等、教育の方法に関する課題についても、例えば専門性の高い元校長や現職教員等からも学べるようにした。セメスター後半では、それぞれの成果を、模擬授業やロールプレイ等にして発表し、それを基に全体で協議を深めた。このような学びの過程を通じて、各自がそれぞれの課題を十分に習得できるように授業を展開した（Q16）。

